

観音菩薩の宗教 ①

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

大乘仏教の代表的菩薩としての観音菩薩



モンゴルで木版印刷されたチベット語訳大本『般若心経』
22 x 9 cm 全6葉 年代不詳 筆者蔵

日本は大乗仏教の国である。大乗仏教はブツダの入滅後五〜六百年ほどしてインドに現れた新しい仏教の運動で、中国、チベット、モンゴルやペトナムなど、広大な地域に広まり、今なお多くの人々に信仰されている。多様な思想を展開した大乗仏教であるが、その中心のひとつは菩薩思想である。菩薩とは古代インドのサンスクリット語のボーディサットヴァを漢字で音写した菩提薩埵の短縮形で、悟りを目指す修行している人を意味する。元来、菩薩は前世の、もしくは悟りを開く前の修行中のブツダを指していた。すなわち、お釈迦様、ゴータマ・シッダールタのことである。これに対しブツダとは目覚めた人の意味で、ゴータマが悟りを開いた以降の尊称として用いられた。

大乗仏教の時代になると、多くの菩薩が登場した。こうした菩薩は神格

化された尊崇の対象として生み出されたものであった。大乗仏教の菩薩には、修行時代のゴータマへの敬意や思慕とともに、ブツダになってからの功德が反映していた。それらの菩薩たちはブツダになる機根を備えていながらあえてブツダとならず、すべての衆生に寄り添ってくださったといえる。信ぜられた。そのため大乗の菩薩はブツダ以上に人々に近い尊格として広く尊崇されてきた。

菩薩の種類は多様であるが、いずれが大乗仏教の代表的な菩薩であろうか。この問いに答えるのは必ずしも容易ではない。例えば、昨年『高尾山報』に筆者が連載していた地藏菩薩は、日本において時代や地域を通じて高い人気を博したが、インドでは単独で尊崇された形跡がなく、大乗仏教の菩薩を代表する尊格とはいえない。日本の国宝第一号として仏教美術の至高を誇る広隆寺の弥勒菩薩も、典型的な大乗の菩薩とするには異論がある。普賢菩薩や虚空蔵菩薩も地藏菩薩ほどの大衆的な人気がないし、日光・月光菩薩や妙見菩薩、薬王菩薩となるときさらに認知度は低くなる。こうしたなか、観音菩薩を大乗仏教の代表的菩薩とすることに異論はあるまい。

それでは大乗仏教とはいかなる宗教か。先に述べたように大乗仏教とは新しい仏教であった。仏教でありながら改革を目指した点でキリスト教の宗教改革になぞらえる見解もある。大乗仏教徒たちは、ブツダの教えを踏まえた上で、新たな展開をして因習を乗り越えようとした。その際、伝統的な仏教の思想はしばしば否定された。こうした否定的側面が典型的に現れたのは、代表的大乗仏典と言ってもよい『般若心経』である。それを証するように、玄奘訳の漢文『般若心経』には、わずか二六〇〜二六二文字

のうら否定を表す「不」が九回、「無」が二十一回も用いられている。『般若心経』が否定の哲学と評されるゆえんである。『般若心経』においては、仏教であれば最も重要であるはずの四聖諦ですら「無い」とされる。四聖諦とは「苦・集・滅・道」というブツダが悟った四つの真実で、これが「無苦集滅道」として否定されているのである。

そもそも経典とは、ブツダのお説教を記録し伝承した典籍である。大乘仏典はブツダ入滅後に成立した経典であるが、そこでもブツダが説いた教えの形式を取った。ところが、『般若心経』のなかでお説教をしているのはブツダではない。『般若心経』の冒頭は、「観自在菩薩は深い智慧の完成を行っていたとき、この世のすべてはみな空である」とご覧になって、あらゆる苦厄から救ってくださった(観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見

五蘊皆空度一切苦厄)と始まり、この教えを説いているのが観自在菩薩であることを示している。玄奘訳では観自在菩薩と訳されているが、玄奘以前の翻訳で膾炙した観世音菩薩、観音菩薩と同じである。仏典では説教をする人、教えを述べらる人を教主という。本来すべての教主はブツダであるべきだが、大乘経典によつては、教主がブツダ本人でないものがあり、『般若心経』はそのひとつに数えられる。つまり、『般若心経』では、ブツダの教えを観音菩薩が否定していることになる。否定した上で説かれたのが、大乘仏教の中心思想である空の哲学・宗教であった。

ところで玄奘訳『般若心経』は小本とされ、サンスクリット語やチベット語などの『般若心経』には大本とされる若干長いバージョンがある(拙著『般若心経』二六二文字を読む・知る・

書く)平凡社を参照。大本では、観音菩薩が傍らにいるブツダに替わって説教をし、説教を終えるとブツダが「その通りだ」と讃えたことが記されている。つまり、観音菩薩はブツダの目の前でブツダ自身の教えを否定し、さらにそのことをブツダが嘉したとされている。これにより、『般若心経』の思想はブツダの思想を否定しながらも仏教から逸脱せず、仏説として保証・印可されたことになる。このことは、大乘仏教が時にブツダの思想を批判しつつも、それを乗り越えて新たな仏教を展開したことと同義であり、その役割を観音菩薩に担わせた点で、観音菩薩が大乗仏教の代表的菩薩であることの証左となっている。

このことは数多ある『般若心経』の解説書が触れて来なかったが、ここに卑見を示して観音菩薩の大乗菩薩としての重要性を指摘するものである。

高尾山の昆虫

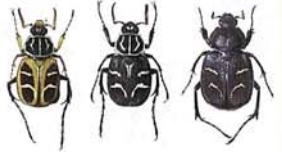
オオトラフハナムグリ

以前はオオトラフコガネの名前で親しまれていたオオトラフハナムグリは、実にカラフルで間違いなく美麗種だと思います。オスは触角が発達し、体色も極彩色と言ってもいいですが、メスは意外に地味な黒色をしています。

こんなところから、本種に出会うとオスの鮮やかな配色と質素なメスという点で共通するオシドリを連想するのは私だけではないでしょう。

面白いのは、オスなのにメスの体色をした個体が出現したり、反対にメスなのにオスの派手な色彩を持つ個体が見られたり、色彩のバリエーションが豊かなことです。

本種は山地性のハナムグリで、夏季に山地のノリウツギの花等によく飛来します。ノリウツギはハナカミキリやハナムグリがよく訪れる花として知られ、山地の林縁でよく見られますが、高尾でも薬王院を始め、所々で自生しています。



本種を見る機会が多いのは裏高尾の方が確実に、花上や草に止まっている美しく可憐な姿を見ると、そこそこ高い山に来ているような不思議な気分を味わうことができます。

(撮影・文松島 孝)